
この世で最も下卑た勇者

sukesuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世で最も下卑た勇者

【著者】

Z5254Y

【作者名】

sukessuke

【あらすじ】

少年は、ただ空だけを見ていた。処刑台までの道のりで少年は思い出す。

自らの罪を顧みながら思い出す。
自らの罪の軌跡を。

処刑台までの道のりで（前書き）

初めての投稿なのでよろしくお願ひします。

処刑台までの道のりで

空が青かった。自分の見る最後の空だというのに吸い込まれるような青色だった。

あれほどの事があったのに、それらを忘れてしまったくなるほどいつも道理に澄み渡つている。

自分とかかわった人々すべてを不幸にして自分の歩いてきた道には、数えきれないほど死体の山を築いてきた。

唯一無二の親友を裏切り、こんな自分に好意を抱いてくれていた人にはその好意を利用して切り捨てた。

大を生かすために小を殺し続けた自分には今の末路がお似合いだとも感じてる。

自分の犯した罪を自分の死によつて清算できるかどうかは、わからぬ。

キリストは、処刑台まで自らを磔にする十字架を運ばされたというが、今の自分には土台無理な話だった。

なくしてから初めて気付くもの、今の自分には、四肢がなかつた。

腕は、肘から上が脚は、太ももから下がきれいに切り取られていた。だから今は自分を殺すであろう黒い覆面を被つた大男の肩に担がれて、小高い丘の上に立つ十字架のところまでなすすべなく運ばれようとしていた。

四肢があつたところで抵抗する気もなかつたが、今はただ青い空だ

けを眺めていたかった。

この世界に生を受けた時とかわらぬこの世を。

やつやつて俺はこの世界に転生した時のことを思って出す。

血の罪の軌跡を

処刑台までの道のりで（後書き）

誤字脱字、などあれば教えてください。

プロローグ すべての始まり

それは、生まれた時から一つだった。それは、その聰明な頭で、生まれたときから理解していた。

自分は一つだと、一つしかない種族で一つしかいない種族だと

途方もない時間の間孤独だった。

それは、孤独のあまり一つの新たな種族を作った。

その種族は、瞬く間に地に広がり増えた。

その間に種族たちが、愚かしくも互いを傷つけて滅び去るのも何度も見た。

世界の安寧を願いそれは、世界に原初の闇をかけた。

それから再び長い時が流れた。

そしてそれは、悠久とも取れる長いを時間かけてその種族の世界の闇がはれ光が満ちはじめているを感じた。

そしてそれは、動き出す。

世界を再びを暗い闇で包み込むために。

「誕生」

結果から簡潔にいふと、この俺小澤悠太は、享年17歳で死んだ。

日々の行いは、悪くなかったほうだと自負しているが、この世界のどつかにいる神様には、嫌われていたらしい。

とにも、かくにも、17歳の時、俺は正面から突っ込んでいた大型のダンプに轢かれてミンチになった。

どのぐらいいたつただろうか、どこか温かい水に包まれてひたすら寝て起きてを繰り繰り返していたような気がする。

浅い夢、深い夢。

それらを交互に繰り返して俺は、血らの身体が覚醒に近づいていくのを感じた。

知覚したといつても思考したのではなく本能的に感じたのである。

そうしてしばらくたつた頃、突然頭に甘く鈍い痛みを感じた。

痛みは、額を伝つてうなじに流れ背中を通り踵まで達した。

その痛みの伝導が終わつた瞬間。

今度は身体が一気に覚醒に傾く、先ほどの甘く鈍い痛みではなく悲鳴を上げたくなるような激痛。体を覆つていた水が流れ出し、それと同時に体が押し出される。頭、首、肩、胴体、腰、脚から足そして踵、つま先。

身体がすべて外に出て俺が初めに感じたことは、衝撃、光、匂い、感触、すべてを同時に感じた。

最後の衝撃によって自分の中で何かが外れ俺は、泣き出しちゃつた。

もちろん17歳男子の臭い泣き声ではなくて、

ところが赤ん坊の泣き声である。

自分が生まれてどのぐらいたつただろうか、ふと目を覚ますと大人たちが怖い顔して駆け回っている。

何かあつたのかな、などと考えているときれいな金髪碧眼女性が生まれたばかり俺の身体に毛布をまいて俺を抱いてどこかに運ぶ。

生まれたばかりの俺をどこに連れて行くのだろうか？

そこまで考えると考えるのがめんべくくなつてまた寝た。

ひとり、ひとり、俺の顔に温かいしづくが落ちる。それによつて目を覚ました俺は、先ほどの女性が泣いているのが見えた。

今思えばこの人が俺の母親だったのかもしれない。

なぜ「かもしれない」になるのか。

結果から言つと俺は捨てられた。毛布に包まれたまま俺は、魔物の巣食う森に置き去りにされたのだった。

「出会ご」その一

小澤悠太前世では、ダンプにひかれて享年17歳で死亡。

なぜか生まれ変わつても前世の記憶持つたままでただ今、絶賛赤ん坊ライフを満喫中。

吾輩は赤ん坊であるまだ名前はない。なんちゃってな！

生まれ変わつたのはいいけれどなんでか生まれてすぐ捨てられてしまつた。毛布に包まれたまま魔物の森に置き去りにされた。人でなしか！

そんな感じで人生初めての命の危機を生後三時間で体験しちまつたぜ。いやっほう！全然嬉しくねえ

そんな時、俺を助けてくれたのが今の俺の育ての親。でつかいドラゴンなんだ。

いやドラゴンだぜドラゴン、なんとか知らねえけど魔物に襲われそうになつたとき空からバツて現われてシユツてやさしく俺のことをつかんでそしてズサーーッて感じで俺のことを空に連れ去つた。

まさに三拍子バツ、シユツ、ズサーーッて感じ、ちょっと待てズサアアアアアアで感じかも。

まあつまりこの時俺は、3つのことを考えた。

一つ目は、魔物を見たときは、あんまり感じなかつたけれどドラゴ

ン見たときえらくなファンタジーぽい世界に来てんなどスゲー感じた。魔法とかもあんのかなワクワク。

「一つ目は、命の危険を感じたのも生後三時間だが初めてのSKIHIGHも生まれて三時間だつたぜ。いやつほうーうん、じつけやはつほう！」

あつスペル間違えた。

そして栄光の三つ目は、パンパカバーン。現在進行中で生命の危険ありつてことだああああああ！

そしてドラゴンは、羽を広げ制動かけて着陸態勢に入る。そしてドッカーンて感じで着陸。

ちなみに俺は着陸のとき思いつき泣き叫んでしまった。もううるううわーー、ではなくオギャーー、である。

そんな感じで着陸したドラゴンはそっと俺のことを地面に降ろし優しく俺に囁いた。

囁くというよりも響くのほうが正しいかもしない。その声は、優しく俺の中に響いた。

（今あなたには、理解できないかもしない。ただ引き寄せられたというよりも気が付いたらあなたのこと助けていた。私たち誇り高い竜の血族は、運命と血のつながりを最も信奉している。あなたから運命のつながりを感じた。だからあなたは、私の子。我が子よ今は眠りなさい。あなたのことは、この誇り高き竜の血統の一人、

イーリス＝ハイドヴェルトがあなたのことを守ります）

この言葉の後俺は、意識を失った。

「迷子」

「うおしゃつああああああああーやああああつてやんせええええ
！」

俺は両「じぶし」を構えると自らを取り囲む魔物の群れに向かつて走り出した。

右「じぶし」を振ると魔物がドカーンと吹つ飛び左「じぶし」を振るとズバーン吹つ飛ぶ。

かくあれ、10分後には取り囲んでいた魔物の掃討が終了し帰宅の途に就く。

「火竜山脈北東方面制圧終了」。まあこれで東西南北全部制圧したなんじゃ帰るか。」

来た道をダッシュで帰る。それでも帰るのに10日はかかるがな。

俺が捨てられて14、5年たつたかな？正確な時間はわからぬが体感だと大体そのぐらいである。

捨てられて、火竜山脈の女王である今の母さんに捨てられて育てられて14、5年たつということでもある。初めのうちはビビつていたが（赤ん坊の姿である）慣れとは恐ろしいものでドラゴンの育てられるのにも慣れてしまった。というより赤ん坊だったのでなされるままだったというのもある。

まあそんなこんなで5歳になるまで丁寧に育てられた。 そりいえば5歳になるまでも元の世界じゃありえないことがいくつもあった。 まず物を食べる必要がなくなつた、これは母さんが言つてしまつた。

（我が子と私では食べるものが違うので生氣として私の栄養を直接流し込んだ。だから体が慣れて自ら周りから取り込むことができるようになつたのかもしない）

だそうだ。

今は呼吸をするように周りから吸収している。

後はこれもやつぱり驚異的な身体能力の高さだらうか。

脚だけはすぐ速くて50メートルを2、3秒で駆け抜けてる気がする。

そんなこんなで5歳からは体ができたので一人だちする教育を受けた。 サバイバル技術や歴史、料理その他もうもうの生きるために必要な知識経験を積まされた。

これ母さんが時期が来ればこの火竜山脈から出て行けと言つてているのに他ならない。

経験はともかく知識はここにいるつえでは使わないからな。

そこで三か月前にはとうとう魔法を習い始めた、が肉体のスペックは高いのに魔法の才能は何一つなかつた。 火、水、氷、土、風、雷、光、闇どれをとっても発動しなかつた。

これについては母さん曰く。（魔力の保有量は一般的な人間族を離れてもはや竜族わたしに近いのに発動しないのはおかしい。普通どんな生物で知性さえあれば魔法が使えるるはずなのに）だそうだ。

これについてなら思い当たることはある。これって俺が異世界の記憶持つまま転生したからじゃね。

ということできちんと魔力を鍛えて徹底的に体を鍛えることに決めたのが2週間前それからこの火竜山脈に繩張りを持つて魔物共に片っ端から喧嘩吹っかけて火竜山脈統一を目指した。

そんでもってそれを完了させたのが五分前ついせつときである。

そんなこんなでやることを失くした俺は意気揚々と母さんのところに戻りうとしたのだがたつた今とんでもないことの気付いた。

生まれてこの方そこまで遠出したことなかつたもので

「え、 いいじゃん？」

不肖1-4、5歳迷子になりました。

「田舎こ」やのへ

「え、リルーラー。」

いやわかんない。迷つたチヨー迷つた。

今までだつて方向わかつてたわけじゃないし、大きめの魔力を感じる方向にただつぱしつていただけだし、なんか適当に方角言つてたけどそれも氣分なんでわかつてるわけじゃない。

母さんが少しでも魔力を垂れ流してくれたらどれだけ離れててもわかるんだが、母さんがそんなミスするはずないし困つた。

とやこ今まで考えたときと遠くからず"じへ小さな悲鳴が聞こえた。

しまつた油断したと思つた時にはもう遅い私の脚は魔物の巣穴と思われる穴に吸い込まれていた。

不幸中の幸いだらうか私の身体は固い砧盤にぶつかることなく何かやわらかい物の上に落ちたようだ。

「キシヤ

」

周りから威嚇するような声が聞こえて何かが私の腕に思いきりかみついた。

痛い、痛い、痛い、痛い。

初めて感じる濃密な死の気配に恐怖した本能の命じるままに魔力を練り上げ自らの属性である風の初步魔法ウインドカッター腕にかみついている何かにぶつける。

「グギヤ」

何か木端微塵に飛び散ったのだろう顔に生暖かい液体がかかる。普段なら普通に顔についた液体ぬぐつていただろうがここは洞穴のような場所なのでもともと視界が利いてなかつたから必要なかつたのと隠蔽していた魔力を解放したので魔力探知が使えるようになった。

1つ1つは微弱だがその探知に引っかかつた数が尋常ではない。実際に100は超えていたその事実に気付いた私はたまらず悲鳴を上げた。

その直後だろうかもう一つとてつもなく巨大な反応が上から降ってきた。

そして身体から力が抜けるような感覚がして私は気を失った。

悲鳴が聞こえたので急いで俺はその地点に向かひ、するとハリヒは穴があつて悲鳴が聞こえたのもこのようだ。

とつあえず中を探知してみると微弱な反応がたくさんと少し大きめ反応が一つビリビリ襲われているようなので何も考えず穴の中に入る。

「この数はまずいなー」

と入つてから速攻後悔して周りの反応が微弱なので思いつきり周りから生氣を吸い上げる。

案の定俺に生氣を吸われて反応が一気に消え去る。

「よし」

そうして俺は氣を失つたであつて、悲鳴を上げていたものを抱いで跳躍。穴から脱出した。

「出ぬこ」その3

困ったなー」と困った、悲鳴が聞こえたから助けに行って穴に落ちて囮まれてしまふがなく周囲の生物の生氣を吸つて皆殺しにしてから脱出したのはよかつた。

ここまではよかつたここまでは、そう問題はここからなのだ。脱出してもう2時間ほどたつがまだ目を覚まさないのだ。

とこつよりかなり弱つてゐるこれは俺が生氣を吸いすぎたのが問題だら、とこつより手を施さないといこの少女は死ぬことになる。

じゃあ吸つた生氣返せばいいじゃんといふことになるがその返却方法が問題なのだ。吸うだけならノーラッチでもできるのだが譲渡には皮膚と皮膚の接触が必要になる。が皮膚と皮膚では渡す時のロスが大きすぎてとても俺の方が持たない、だけど粘膜と粘膜を接触させめる形で譲渡すればほとんどロスがない粘膜と粘膜つまりキスだ。

これはまずい、まだ男ならしおがなく人命救助のノリでできるが、しかも相手は女である100歩譲つてブスならましだが目のために横たわる少女は花も恥じらうようなとてもかわいいといふよりも可憐な容姿をしているのである。

それを意識がないことをいいことに命を助けるためとはいえ無理やりキスするのは心が痛い、大体前世だつてバリツバリチエリーボーイだったのだ。キスどころか手をつないだことすらない、つまり俺はとてもなくイモつていた。

誰か俺のことをおや笑つてください。結局できませんでした。

結局俺はロスする」と覚悟で額に手を置いて今あるだけの生氣を送り込んだ。周りからも生氣を取り込みながら送り続けたが体中の生氣を送り込んだところで俺もガス欠になり気絶した。

どのくらい時間がたつただろう・

魔物の巣と思われる穴に落ちて周りを魔物たちに囲まれて死を覚悟したら体から何かが抜き取られる感じしてそのまま気を失った。

「ここはどこなのでしょうか?」

思つた疑問を口にする周りを見渡すと目の前の巨木を背に黒い髪の自分と同じくらいの少年が気絶していた。

「この方が助けてくれたのでしょうか? だとすれば命の恩人を放置して置くわけにはいけませんね」

彼にひとまずフライの呪文かけて運ぶ準備をする、その時そよ風が吹いて少女の髪が少しだけ持ち上がりそこからとがった耳がのぞい

た。

生気が切れるとどんな気分がするか知ってるか？きっとなつたやつはいないだろうと思つ。だつてなつたら急速に補充しなないと死ぬから。

俺みたいに周りから吸収できるなつともかく普通の奴はできないと思う。だからなつて初めて生きてるやつの感想言わしてもううと「何も感じない」のだ。ただゆつくりと死が近づいているのだけが知覚できる。

諸行無常。生きる事にも死ぬ事にも執着が持てないそんな状態。そんな中で必死に周りの生気を集めようとするけどやる気が起きない、どうとでもなつてしまえ。そんな気分俺もあのままだったらおそらく衰弱して死んでしまつていただろう。

だけど、そんな時「声」が聞こえた。「声」と自分で言つてもそれで正しいのかはわからない。「声」のよつな曖昧なものが正しいだろ。とにかくその声は死にゆく俺に言葉のよつなものをかけた。

「 、 。 」

なんといつたのかはほとんど分からぬ、ただそいつの言つた最後のセリフだけははつきりと分かった。

「汝はまだ死ぬときに非ず、ならば私が汝が死ぬべきその瞬間まで汝を救い汝を生かそう、それが私に運命であり使命であり宿命でもある。古の友との約定と私の使命と汝の運命の下に汝に力を授ける

わが名は.....。

「汝に力を」

そつ声は囁いた、その瞬間突然頭に甘く鈍い痛みを感じた。

痛みは、額を伝つてうなじに流れ背中を通り踵まで達した。

どこかで感じたどこか懐かしい痛み、そう知覚した瞬間。今度は想像絶する痛みが頭を襲つた。何百匹もの蛇が頭の中でのた打ち回るような痛み、この世の終わりといつても信じられる痛み。そんな痛みが永遠にも等しいと感じられるような時間襲つた。耐えた、耐えることしかできなかつた。

どのくらいたつただろう?理解できない。

あれほど恐ろしい痛みを促した頭はもう痛くなかった。その代わりに温かさを感じた、何よりも柔らかく、何よりも優しい。そんな温かさ。

痛みを感じる前の虚脱感はどこにもなかつた。

俺は自然に閉ざしていた瞼を開けた。

「Hルツの村で」その1

快適な目覚めとはいかなかつたな。俺はまだ温かさの残る額を手で気にしながら体を起こす。

そう快適な目覚めとはいかなかつたのだ。目を覚ました時いきなり地面が揺れた、建物の外から断続的な爆音のような音が聞こえてきた。

戦闘か？

その答えは1秒後に飛んできた。

（我が子よ！大丈夫か？無事か？体に障りはないか先ほど異常な魔力を探知したのだ、頼む返事をしてくれ我が子よ！ええい邪魔だこの耳トンガリ共その肉の1片に至るまで我が業火により灰にしてくれようか！）

どうやら、外の爆音の正体は俺のことを探しに来た母さんのようだつた。

耳トンガリ？なんだそれと素朴な疑問がわくがまでは返答を優先する。

（母さん俺は大丈夫だ、体にも特に異常はないまずは落ち着いてくれ）

（落ち着け？我が子はさらわれたのだぞ！これが落ち着いていられるか！今すぐ母が迎えに行く今しばらく待つておれ）

(えつ、だからちょっと人の)

ズガ
ン

(話を聞いてくれええええ)

遅かった。

爆音が鳴り響き土煙がもうもうと上がる中、見たことのある朱い巨体がかなりご立腹の様子で鎮座していた。

(わが子が火竜山脈統一するうううと言つて私の巣を出て行つてからずつと魔力を探知していた、それがほんの一時間前急に途絶えたのだ、心配で我は死ぬかと思つたぞ。頼むからこの母をあまり心配させないでおくれ)

悲痛な声が伝わってきた。

その声だけです』べ心配させてしまつたことが分かる

(じめん、母さん魔物に襲われていた女の子を助けようとして周りから生氣を吸収しちゃつたせいで女の子が衰弱しちゃつてそれを助けようと思つて生氣を返そうとしたら今度は俺の方がダウンしちゃつて氣を失つたんだ。気付いたらここにいた、体に治療の跡があるからたぶん連れ去られたんじゃなくて、助けようしてくれたんだと思つよ)

(なるほど、先ほどから耳トンガリ共が我に何か言おうとしていたのはそれか)

何か納得がいくような一コアンスが伝わってくる。

（母さん、 セツキから耳トンガリ、 耳トンガリ、 って何？）

と先ほどから感じていた疑問をぶつけてみる。

（ああ、 それはエ）

すると、 誰かが母さん声を遮り誰かが代わりに答えた。

「私たちエルフのことですよ、 イーリス殿の息子さん」

「エルフの村」その2

見ると建物の入り口のところに長身瘦躯の男が扉にもたれかかっていた。

「エルフ?」「はい、エルフです」

「ほら、このとつづ耳も長いですよ」

男は長めの髪をかき上げてとがった耳をこちらに向けてみせた。そうして優雅に一礼して名乗った。

「申し後れました、わたくし私この村の族長やらせていただいております。アイゼン・ハイドです、以後お見知りおきを」
(まずは、私が起した非礼をわびるとともに念のため私も名乗ろう。今は2つを残すのみであるがこの火竜山脈に息づく誇り高き竜の血統ハイド・ヴェルト家の一員イーリス・ハイド・ヴェルトだ。こちらが我が息子にして誇り高きハイド・ヴェルト家の一員。なお我が子はまだ戴名に儀式を行っていないのでまだ名前はない)

と母さんも名乗り返す。俺も頭を下げた。

「この火竜山脈で知能のあるものならあなたの名前を知らぬものはいませんよ、イーリス殿。そして、息子さんあなたにはお礼を申し上げておきたい我が不肖の娘の命を救つていただきありがとうございます。この恩はいつか必ず」

娘と言われて誰かわからなかつたがすぐに森で助けた女の子思い出した

「いえ、できるだけことをしたまでです。それに俺も命を救つてもらいましたから」

「そうですか、そういうつもりだと助かります。あのできればこの後体調が優れるなら私の娘に会つていただけませんか？娘も自分の命恩人に礼が言いたいと思いますし、私もあなたが無事だということを娘に伝えたいのでよろしくお願いします」

俺は別に断る理由もないのに即答した

「別にかまいませんよ」

怖かった、すゝくすゝく怖かった。自らが愚かなせいで誰かを不幸にし誰かを死に追いやつとしている。その事実がどうしようもなく私のことを責めた。

もしあの子が死んでしまったら私は何を持って償えればいいのだろうか？

死は死でしか償えないそのことはすでに私の中で答えは出ていたのに何がが私の中でその答えが正しいものとは認めたくなかった。

いや違うの」とですら私は何であるか知っている。生への執着、死への恐怖。この二つで私のことを説明できてしまつ。

あまりにも単純、そしてあまりにも醜い。高潔なるハイエルフの血を引くものとしては生来の形からかけ離れていた。

だけどこのときの私はそのことに気づいていなかつた。気づくべきだつた。だが実際気づかなかつた。

そして私は祈つてしまつた、この世界にいない神に。

どのくらい嘆いただらうか？時間の感覚がない。

しづらしくすると声が聞こえてきた。懐かしい何かの影を感じさせるすゝく冷たい声。

あなたは彼を助けたい？

もちろん

どんな手を使っても？

ええ

わかった。なら私が助けてあげる。

でもその代わりにあなたの体を少し貸して？

かまわないわ。

私の体を貸してあげ

でも必ず彼を救つて

ええ、もちろん必ず救う

わ。 ね。 る。

それが私の使命、それが彼の運命、そしてそれが友との約束なのだから。

「田舎」や「4（前編）」

まだ途中です。

「出でて」その4

アイゼン・ハイドと名乗ったエルフに連れられて俺たちはもといた建物を出た。

「あのーこれ壊してもよかつたんですか?」

「敬語じゃなくともかまいませんよ、それと少し困りますがすぐ魔法で直すので少々なら別にたいした損害じゃありません」

「少々ねえ」と建物のど真ん中に大穴が開いたその惨状を見ながらため息をついた。

これでもか?エルフは壊が広いなーとどうでもいいことを思案する。

そのまま村の中心を突っ切つて周りの建物より一回り大きい建物にたどり着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5254y/>

この世で最も下卑た勇者

2012年1月13日14時53分発行